

長雨と日照不足に係る農作物等の技術対策

令和2年(2020年)7月20日
山口県農林水産部

I 水稲

1 病害防除対策

長雨日照不足が続き、いもち病が発生しやすい条件下にあるため、発生状況を確認し、発生を認めた場合は直ちに薬剤を散布する。また、紋枯病にも十分注意する。

不要となった補植用苗はただちに処分する。

2 日照不足対策

遅植え等生育量が小さいものは、茎数や籾数を必要以上に増加させるような過肥は控える。

また、ほ場排水に努め、深水状態が連続しないようにする。

II 大豆

1 播種済みほ場

(1) ほ場に入れるようになったら、速やかに中耕培土を行う。

(2) 開花期前後の大豆についても、土壌の通気性確保と雑草防除を目的として、可能であれば中耕・培土を行う。

(3) ほ場条件が悪く中耕培土ができずに雑草が多発した場合は、生育期に処理が可能な茎葉処理剤を早めに散布する。

2 未播種ほ場

(1) 播種できていないほ場は、暗渠排水等の開栓確認を行うとともに、排水溝の設置や、排水口への確実な連結確認を実施するなど、できるだけ早い時期に播種できるようにする。

(2) 栽植密度 20~25 本/m²が確保できるよう、播種量を増やす。播種量増加に対応できるよう、種子量や播種機の調整・確認を行う。

(3) 雑草が大きくなり、播種後に再生の可能性が高い場合は、汎用除草剤と初期除草剤を混用して対応する。

(4) 苗立ち後は、本葉期に入ると速やかに中耕培土を行う。その後は、早い時期から畝間灌水を行い、土壌水分を高め、初期生育を確保する。

III 野菜

1 降雨が続く場合は、排水溝の点検を行うなど、ほ場内の排水に留意する。

2 果菜類は、果実の若どりや摘果(花)を行い、草勢の回復を図る。

過繁茂した茎葉は間引きせん定を行い、下葉や病葉を除去して通風をよくするなどして地上部の負担をできるだけ軽減する。また、施設野菜では、循環扇なども活用し、ハウス内が過湿にならないよう換気に努める。

- 3 根が衰弱し養分吸収機能が低下すると、肥料切れ状態や微量要素欠乏を起こしやすくなるので、草勢の回復を図るため必要に応じて液肥などを葉面散布する。
- 4 病害の多発が予想されるので、病害の早期防除に努める。特に、育苗中のイチゴ苗は、炭そ病抵抗性品種を含め、予防散布を徹底する。
- 5 ほ場準備を土壌が過湿状態で行うと、播種・定植後の生育不良を招きやすいので、ほ場が乾燥して土壌水分が適湿となってから行う。

IV 花き

- 1 降雨が続く場合は、キクでは黒斑病、ユリ類・リンドウでは葉枯病等が発生しやすくなるので、雨上がりには防除を徹底する。
- 2 施設栽培では灰色かび病等の発生が多くなるので防除を徹底する。
- 3 施設花きでは、湿度が高くなると、病害の発生、軟弱な生育が多くなるので換気の徹底や循環扇、加温機を利用して湿度低下に務める。
- 4 不要な枝梢や下葉を取り除き、通風を図る。
- 5 施設等で育苗中の花苗は、軟弱徒長とならないように、天候に応じて灌水（量・間隔）を加減する。
- 6 急に天候が回復した際には、遮光資材を展張し、急激な温度上昇を防ぐ。

V 果樹

1 排水対策

長雨により根痛みが懸念されることから、排水溝の溝上げで雨水を効率よく園外に排出する等、排水対策を図る。

特に、幼木では梅雨明け後の急激な乾燥にも対応できるよう、根痛みを起こさないように排水対策を徹底する。

2 新梢管理による日照改善

日照不足により果実肥大不良や品質低下が懸念されるため、新梢の誘引やシルバーマルチ等により樹冠内の日照改善を図る。

3 適正着果量の確保

果実肥大不良や生理落果が懸念されるので、落果等の推移を見ながら、適正着果量の確保に努める。

4 病虫害防除

かんきつの黒点病、かいよう病、なしの黒斑病、黒星病、ぶどうの黒とう病、晩腐病等、病虫害防除を的確に行う。

5 生理障害への対応

なしの水浸状果や受粉樹の花芽着生不良、ぶどうの縮果病等の生理障害の発生が懸念されるので、排水対策や日照改善等に努める。

6 水害への対応

- (1) 浸水園では早めに排水に努めるとともに、堆積土のある場合は早期に除去する。
- (2) 根が露出している場合は早急に覆土する。
- (3) 樹体に付着した泥は速やかに洗い落とす。

VI 畜産

1 飼料作物への対応

- (1) 雨水の浸み込んだロールベール乾草やサイレージ及び冠水したスタックやバンカーサイロは品質を確認し、飼料用として適当でない場合は、不足分の確保に努める。
- (2) 滞水したほ場は、排水溝を掘るなどして排水を促す。また、既存の排水施設に詰まりがないか点検して、排水路を確保する。
- (3) 湿害や発芽不良等により生育の見込みがない場合は、草種を検討し再播種する。

2 家畜管理への対応

- (1) 畜舎内の湿度上昇やアンモニアの発生等、畜舎内環境の悪化を軽減するため、通風と換気を行い、敷料は早めに交換する等畜舎内の乾燥に努める。
- (2) 浸水した畜舎では速やかに排水対策を実施するとともに、舎内等の消毒・乾燥を促進する。また、畜舎内の雨水が引き次第、汚染部分を水洗いして消毒剤や石灰散布、石灰塗布を行う。
- (3) 乾草、サイレージ等の飼料は泥や雨水に当たっていないことを確認して給与する。
- (4) たい肥や尿溜に入った雨水が流出する恐れがある場合は、土盛りなど行い環境流出を防ぐ。